総則部会

県研究主題 学習指導要領の内容を踏まえた教育課程の編成と教育活動の工夫・改善

提案１　　提案者　加藤実千代（中地区）

＜研究主題＞ 特色ある学校づくり　地域に生きる学校の在り方

１．提案内容

（１）はじめに

生徒の実態から生徒につけさせたい力は「お互いを向上させる人間関係」「信頼感」「思いやり」を求める声が多かった。これは、「学校」「家庭」「地域」が協力・融合し、取り組むことで子供たちの生きる力を育てることを再確認した。

今回の提案にあたり、伊勢原市教育研究会教務部会として、日々の実践例を整理する中で適切な教育課程の編成や学校全体としての教育活動の工夫・改善の一端を検証することとした。

（２）研究テーマ設定の理由

第一の観点－「地域連携」の重要性を見直す必要

第二の観点－「学校」「家庭」「地域」の協力

第三の観点－伊勢原市教育振興基本計画による

（３）研究テーマに迫るための手立て

ア　「特色ある学校づくり」の現状に焦点化

イ　保護者及び地域の外部人材を活用した各４校の年間の取り組みを記録

（４）研究実践

①教科指導に係る事業…保育実習、職場体験学習、大山を知る、「和楽器」講習会等

②学校行事に関わる事業…ふれあい美化活動、ふれあいいなかまつり等

③学校評価に関わる指導…学校地域連絡会

④部活動に係る指導…部活動し同協力者、小学校訪問吹奏楽演奏

⑤その他…あいさつ運動、十三夜・十五夜だんご作り、小中交流授業等

（５）研究の成果

地域各団体や保護者（PTA）とのコミュニケーションと学校からの情報発信がいかに大切であるかがうかがえた。学校の特色としている教科指導や行事など、常に生徒や保護者や地域の「意見」や「評価」から、改善に結びつくような問題提起や指導助言が必要であることが確認できた。

（６）今後の課題

①地域に生きる学校として連携の在り方について検討を進める。学校側より「学校を開く」「地域を知る」

②三年間を見通した地域連携カリキュラムの構築

③長く継続している取り組みの見直し…PDCA サイクルの意識化

④次年度により特色ある活動を実施するための予算の確保

⑤授業時数確保のための行事内容の工夫。

２． 提案１の協議

（質問） １．教育支援コーディネーターは配置されていますか？
２．学校長のリーダーシップによる取り組みはありますか。
３．教科指導に係る事業について、５教科に関して外部人材の参加した取り組みはあるのか。５教科に関しては外部人材に対する抵抗のようなものはあるのか。

提案者より

質問３についてですが、抵抗があるとは思わないが、人材発掘が進んでいないという側面はある。社会では、縄文土器が出土することもあり、資料として土器を借りたり、説明を聞いたりということはある。質問２は、中地区の４中学校は連携が強く一緒に取り組もうという姿勢が強く、情報交換が綿密にできていてそれで賄えてしまっている面があり、コーディネーターは置いていない。史の研究部会の中で役割分担がされている。質問１は、山王中学で実施している、学区の史跡巡りは校長のリーダーシップによるといえる。

（質問） １．教科指導に係る事業について外部講師が主となって行っている和楽器の講習はどのように評価をしているのか
２．今後１０年、２０年を見通した対応をどのようにとらえているのか。

提案者より

質問１は生徒の観察、生徒の学びについて講習後に生徒の学びについてペーパーによる評価の一部を音楽の評価の中に入れている。割合は各学校において確認はしていないが、ごく一部を評価に入れている。質問２について中地区では中学校４校ということで移動もこの４校間で行われている。そういう中で行っているので、教員一人一人が、移動先の実践について見通しを持って移動することができている。また、公務分掌の中に担当が位置付けられていることで継続できている。

（質問）連携で実施することと、授業として行うことでは校内での位置づけは違うのではないか。
伊勢原市は都心部のベットタウンとのことであるが、今後、人、学校が増えた場合組織化されていないと取り組み自体が崩れてしまうのではないか。

提案者より

学校側の意図がしっかりしており、相手のやりたいこととの接点を詰めることが大切。主体は音楽科という点はゆるぎないととらえている。

３． 助言

生きる力、地域との連携については調べてみましたが、昭和４６年ごろから言われている。以前はあえて地域との連携を強調する必要もなかった。しかし環境が変わり生きる力、地域連携について意識して取り組んでいく必要性が高まっている。生徒の自然体験、職業体験等社会体験が減っている中で文部科学省などいろいろなところで言われている。今後は授業時数の確保が課題ではないか。学校地域連絡会の場で議論し、地域の人にも関心を持ってもらい、地位着に行事を返していくことで学校の負担を減らしていくことも大切。これからも子どもたちの生きる力の育成のために取り組んでいっていただきたい。

提案２　　提案者　清水　俊次（相模原地区）

＜研究主題＞

「生徒一人ひとりに確かな学力を身につけさせるための取り組み」

―校内研究や研修・中野中学校区の小中連携を通して―

１　提案内容

（１）　はじめに

生徒の様々な問題行動の改善に取り組むため、「テトラＳ」の手法で成果を上げてきたが、基礎学力の不足により授業に落ち着いて取り組めない生徒への指導を展開、また、経験の浅い教員が著しく増加しており、これらの現状を踏まえた取り組みを展開してきた。

（２）　実践

①　学校教育目標、重点目標、組織

「めざす生徒の姿」を明確にし、これと年度の重点目標を対応させた。この中で校内研究の推進を盛り込み、「一人ひとりの生徒に『確かな学力』をつけるためのよりよい授業づくりをめざす」とした。この目標の実現に向け、全職員が「教育課程充実グループ」「心の育成支援グループ」「学級づくりグループ」「校内研究充実グループ」に所属し、話し合いや提案。実践に結びついた。これらは、学習指導要領第５節教育課程実施上の配慮事項のうち７，指導方法や指導体制の工夫改善など個に応じた指導の充実、14，家庭や地域社会との連携及び学校相互の連携や交流に係る内容の工夫である。

②　一人ひとりに確かな学力を付けるための取り組み（校内研究）

ア　授業改善

生徒に寄り添いながら授業規律を徹底させることと教師側の授業改善を図ることの両面から取り組む。教員は、年齢・経験・所属等を考慮して決められた３つのチームのいずれかに所属し、チーム別に授業研究を行い全員年に一度は研究授業を実施する。

イ　小中連携

２小学校が全入。年間計画の中に、授業参観（双方）や、小学生の体験授業を位置付け、「授業のルール」の掲示、あいさつの推進について共通理解の上に指導している。

ウ　学び・育ちの仕組みづくり

２・３年生の学習体勢はかなり整ってきているが、１年生は個人差が大きく、最初から授業について行くのが困難な生徒が少なくない。中学校入学以前の学びも小中連携して取り組んでいく必要があるとの視点から、「学び・育ち仕組みづくり推進会議」が発足。

〔具体的な取り組み〕

○入学前テスト（算数）　１月の中学校の入学説明会で保護者にも予告。３月に実施し、採点は小学校が行う。学級編成や個人の指導に役立てる。

○春休みの宿題（国語・算数）　中学校が作成し、卒業式前に配付。入学後中学校で回収して全教員で採点する。

○入学後学力診断（国語）　作問は国語科。採点は全教員。

○補習（国語・数学）　上記の結果をもとに基礎学力が定着していないと判断される生徒について、全教員で補習する。今年度は、１学年の 20％26 名が対象。

うち、特に支援の必要な６名は、生徒一人に教員２名で担当。放課後、部活動に行く前の 15 分間で実施。生徒の感想は意欲的。

○小中３校の話し合い　小学校教諭の中学校授業（全学年）参観のあと、テーマを設定して

話し合い。

○学び合いの推進　　授業公開と全教員により、学び合いをテーマに研究会を実施。

③　現職教育（ミニ研修）

経験の浅い教員を対象に、年間 20 回、下校指導後 30～40 分程度で実施。参加型の学習会なので、その中で「昼休みをつくった方がよいのでは？」「教育相談を５月に実施した方がよいのでは？」などの提案が出され、実際に改善に向かった。

（3）　成果と課題

１年生の生活が落ち着いてきている。問題が発生してからではなく、年度初めの補習の機会を捉え、コミュニケーションがとれていることが効果を上げている。今後も取り組みを継続発展させ、中学１年生から卒業後の進路など考えさせていきたい。

２　協議内容（提案２の協議、協議の柱に即した協議）

・「学びの共同体」については、近隣の学校で実績をあげていることから子どもたち全員が居場所のできる授業にしていける可能性が大きいと考え取り入れた。小中連携で話し合う場合には、内容が深まるようにテーマについて事前に担当者の打ち合わせをしっかりと行う。
・様々な取り組みは、トップダウンではなく職員が話し合った内容から実践につなげたもの。
・学校にはいろいろな目標があるが、お題目になりがち。具体的な方策が全職員に共有され、それが子どもたちにも伝わっていることが大切。また、若い先生が自由に提案できている。これが学校の力になる。
・学校は自由度の高い組織だが、それが逆に先生方の孤立を招く。分掌の縦のラインと分掌同士をつなぐ総括教諭の横の連携が重要。
・学習＝人間関係であり、頑張ればできるというメッセージがきちんと届くような取り組みとなっている。生徒の自発性と環境整備の両面が大切。小中連携においても、学力の連続性としてすでに効果を上げているが、より広い視点にも広げ、当たり前のことが当たり前にできるように丁寧に子どもたちに関わっていき、生涯にわたって学習し続けていく基盤を全員の子どもたちに身につけさせていくことが大切である。
・地域との連携は、今後、防災の観点からも大切になる。また、地域協力者の協力を得るには活動の継承に工夫が必要で、さらにカリキュラムに位置付け評価につながる活動にするには留意が必要。

３　まとめ

既存のものにとらわれず主体的に考えていく方向性が大切である。先生方の話し合う場の設定には全体の方向性についてベクトルとして示すことが大切であろう。

地域との連携については、まず地域のことをどれほど知っているか考え直してみる必要がある。また、意欲的な学習に向けて授業離脱をする状況の中で一部の子どもたちにもしっかりと目を向け本気で話し合い、できることからやっていくという取り組みの報告であった。先生方が、自信をもてる取り組みになっており、子どもたちの学びが深まっている。

本日の報告は、教育活動の工夫・改善について、ヒントになることが多かったのではないか。